第七回　待つということ

昨年と同じタイトルで今年第一回目の園長雑感です。

自らかえりみて、短気だなあと思うことがよくあります。また、とても焦っています。焦りの原因の根本は、いつ死んでしまうかわからないってこと。アジアンカンフージェネレーションの歌詞を借りれば「一瞬さ僕らの命など」ということです。

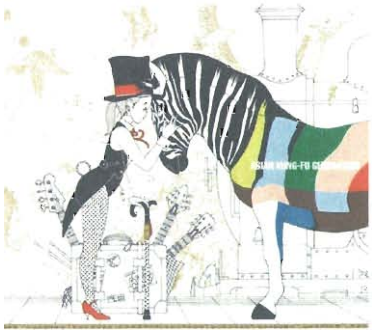
ところで、気が短いと色々な弊害が出てきます。待てない・イライラする・聞けない・落ち着かない等々です。みなさんは、そんなことないですか。

わが子とのかかわりで言えば、子どもの準備を待てない・結果が出るのを待てない・話が終わるのを待てない、子どもに限らず相手のペースを認められないということです。

これはよろしくない。人はそれぞれの時間をもっています。鼓動の早さが少しづつ違うように、です。特に子どもと大人の時間の速さは全く違います。思い出してください。小学校六年間って何であんなに長かったんだろう。

待つとは、他者に身をゆだねること。自分のはからいの及ばないものに任せるということです。これが苦手になったのはなぜでしょうか。

生活のあらゆる場面で選択肢が増えました。服、自動車、ケータイ、どれも色々な種類の中から、好きなものを選ぶことができます。テレビのチャンネルもたくさんあるし、幼稚園だって選ぶことができます。商品の種類が多いほどいいお店でしょうし、コースがいろいろ選べるほうがサービスがいいということになるでしょう。

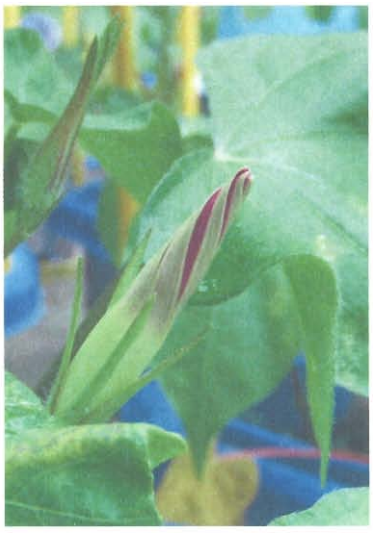


選択肢が多くなるのはいいことのようですが、その反面、自分の思い通りにならないことにたいする不満が強くなっていきます。選択する＝自分の思い通りにする、ということだからです。また、選ぶことは迷うことでもあります。

一見良く見えることには注意が必要です。そこにはらまれている悪い面を見落ちしがちになるからです。良いことと悪いことがあるのではありません。良いことはそのままで、別の面からみると悪いことになる。表裏一体といったらよいでしょうか。

文明の進展は、できるだけ自分の思い通りになってほしいという力で動いているように思えます。どんどんマイ・ペースが保障されるようになり「自己実現」の範囲も広がったようです。

ところが皮肉なもので、獲だ反面失ったものは、他者を受容するという《うつわ》、任せるという信頼、待つという精神の強さ、落ち着き等です。これらは、人間として大切なものだと思います。

自分の親に受け入れられない子どもほど哀れなものはない。障碍（しょうがい）をもった子の親である友人の言葉です。もし親というものが偉大だとするなら、この、選ばずに受け容れるということに、あるのではないかと思うのです。

幼児期の子をもつ一人の親として思います。子どもの一か月、二か月は濃密だから大切にしなきゃな、と同時に、もう少し気を長くして見守るようにならなきゃな。これができたら、ちょっとは親っぽくなれるかな。